

震災から7ヶ月、今こそ傾聴と慈しみある声かえけを！

被災された方々は震災直後はどう食べていくか、どこに住むか、等々の目の前の日々生活することで頭が一杯だっただろうが、3月の大震災から7ヶ月が過ぎ、生活がそれなりに少し落ち着くと、やはりあれこれ思い出したり考えたりして、大変だろうなあと思っていた。

数日前、津波で甚大な被害を受けたあるメル友からメールをいただいた。

【 実は最近、だいぶ落ち込んでおりまして、やっぱり震災から七か月が過ぎるといろいろとありますね～

目の前の事を処理し、動き回っているうちはよかったですけど、生活も仕事もだいぶ落ち着いてきたら、ダメですね～、泣けてきます。本当に涙が止まらない時があります。

今まで何か心が麻痺していたのか？感じないように体が勝手に防護していたのか？と思うほどです。

でもね、きっと次のステージに行くための準備かなと思っています。 】

更に前向きになるためには、やはりこうした時期を通ることが必要なのかなとも思う。

今の心の内を表出することが必要かと思い、「『痛みは辛抱できても 悲しみは辛抱できない』とか。泣きたい時は涙が枯れるまで泣いてください。」という趣旨の返信をした。

大人でもこうですから、子どもたちのこれからは大変だろうなあと思う。

震災後、マスコミで子どもたちの笑顔に救われたという報道が多かったが、子どもたちも成長するに従いあれこれ思い出したり考えるようになり、大変だろうなあと推測している。

震災直後は生活環境が大きく変わったが、「子どもは、今を生きることに生きている」と云われるように、環境に順応しようとする柔軟性をもっているのも、それが笑顔として表われていたのだろうと思う。成長に従い心の内を表現する術（スベ）が身に付いてくると被災のトラウマが頭をもたげてくるのでないかなと思う。

被災体験はその人固有のものなのに、子どもたちは純真なだけに「もっと大きな被害にあった人に比べれば…」と、つい心の内の表出を避けがちでないかとも思う。

震災のフラッシュバックは時々あると思うので、大人、子どもに拘わらず、今からこそ傾聴と慈しみある声かえけがより必要で大事になってくる気がしている。